

「無人岩」という変わった名前前の火山岩が、小笠原諸島の父島にある。むにんがん、あるいはぶにんがんと読む。シリカ（二酸化ケイ素）が56・58%のガラス質の安山岩で、特異な化学組成をもつ。マグネシウム分がきわめて多く、通常の火山岩では一般的な斜長石を欠き、代わりに単斜モンスタイトという特異な輝石を含む。斜長石は地殻の主成分だが、単斜モンスタイトは、コンドライトという隕石にしばしば含まれ、地球上の岩石では無人岩にしか見られない。この輝石は10cm近い大きな乳白色の結晶を形成する。無人岩には古銅輝石という濃緑色の結晶も含まれ、風化浸食を受けると緑色のうぐいす砂ができる。うぐいす砂が見られるのは世界でも小笠原だけである。

無人岩の英名は、ボニナイト Boninite という。岩石はそれが典型的に見つかる産地の地名から名づけられることが多いが、「ボニン Bonin」は、小笠原諸島の古名である「無人（むにん、ぶにん）」に由来する。現在、小笠原と呼ばれる島々は、19世紀前半まで住む人もなく、「無人島 (Bonin, Mounin)」と呼ばれていた。当時は「むじん」という音読みはなかったからだ。そこに最初に人が住みついたのは1830年、5人の欧米人と彼らが連れてきた20人のハワイ人だった。この島々は、先住民が和人と無縁な欧米人という日本ではまれな土地なのだ。1853年、ペリー提督は浦賀に来航する前に父島に立ち寄り、「無人島」に定住者がいると「日本遠征記」に書いた。それを知った幕府は、あわてて咸臨丸を派遣して、日本の領土であることを主張すべく、信州出身の小笠原貞親が島を発見したという江戸時代の作り話にもとづいて、島を「小笠原」と名づけた。本来無名の大地は、恣意的な命名を通してニンゲンに支配所有される「土地」になる。

昨年（2015年）の暮れ、その父島に出かけた。「土地とは何か」を問おうとする神戸での美術展のリサーチと制作のためだった。農耕文明以降の人類史は、土地とその資源の収奪の歴史である。それは近年ますます激化している。そこであらためて人間と土地の関係を美術を通して原点から問い直したいと思ったのだ。それをするには、人間以前の無人無名の大地をリアルに実感する必要がある。計画の当初は、小笠原諸島の西130kmの太平洋上で生まれたばかりの西之島新島に行こうとした。大陸地殻を形成する安山岩マグマを4億トンも噴出し、旧島を飲み込んで膨張を続ける西之島は、地質学者によつて「大陸のあかちゃん」と呼ばれていた。他の地球型惑星には玄武岩はあっても安山岩はない。地球の大陸独特の安山岩地殻がどのように形成されたかは地球科学上の謎とされている。西之島は、太平洋プレートが沈み込む海域の薄い地殻の上で、40億年前の「海洋からの大陸の誕生」を眼前で再現するモデルだという。

「西之島」という和名も1904年以降についた。本土からの移住者が住み始めた「小笠原」から見て「西」に位置するからだ。18世紀初めにスペインの帆船が見つけたときは、船名にちなんで「ロザリオ島 (Isla de Rosario)」と名づけられ、19世紀初めにイギリスの軍艦が見つけたときは「失望島 (Disappointment Islands)」と命名された。かつては、今も無人島で、人が住んだことはない。望むものすべてがあった。

だが、そんな超絶エリアに、専門家でないわれわれが行けるわけではない。当時はまだ火山活動が活発で、周囲4キロ以内は接近禁止であり、それどころか東京から1000km離れた地点まで船を手配するのに莫大な資金がかかる。そこでせめて西之島まで130kmと一番近い父島に行こうと調べているうちに、無人岩の特異な存在を知った。

まず魅かれたのは「無人」という名前だった。父島も西之島と同じく、人類がまだ存在しない約5000万年前に太平洋プレートの沈み込みが始まった際の海底火山が隆起してできた島である。無人岩は、当時の海底の急斜面を溶岩が流れ下ったことでできた枕状溶岩というかたちで、島の北部から頭部の海岸に見られる。私が見たのは、釣浜の東岸だった。多孔質の暗緑色の岩が亀甲紋状のパターンを断崖に描いていた。無人岩と同じ単斜モンスタイトをしばしば含む隕石コンドライトは、原始太陽系星雲で起きた瞬間的な加熱と冷却という熱現象を記録しているケイ酸塩鉱物コンドライトを含むという。無人岩は原始地球だけでなく、原始太陽系にも通じているのだ。

高さ3200mほどの父島の最高峰に登ってみた。西之島は当然見えない。だが視野のすべてが海と空に満たされるなか、足下の地面は見下ろすものではなく、見上げるものであることを知った。地球は宇宙のなかにあるのではなく、それ自体がすでに偶然と必然が無限に錯綜する奇跡的な宇宙なのだ。海と大地がそうであるように、存在のすべては流動のなかにある。われわれは超新星爆発の残骸にすぎない。長谷川直人はもうひとつの無人岩をつくっているのではないかと私は思える。